

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部 最優秀賞

「やさしいおばあちゃん」

松任小学校六年
中屋^{なかや}
佑介^{ゆうすけ}

ぼくの祖母は令和六年能登半島地震で被災しました。

地震が起きた時、ぼくの家族は能登の祖母の家から白山市にもどる途中で、志賀町の西山パーキングというところで休憩をしていました。地震が起きた時、車が激しくゆれて、車のスライドドアは閉まらなくて、電柱もゴムみたいにゆれていて、携帯のアラートがずっと鳴っていました。志賀町には原子力発電所があるのでよく発しないか心配でした。西山パーキングは山の近くにあるので、崖崩れや土砂崩れが起きないかも心配でした。しばらく西山パーキングに待機していましたが「パーキングのトイレに行って地震が起きて閉じこめられたらどうしよう。」とか、「窓ガラスが割れて、ガラスの破片が飛んできたらどうしよう。」とどんどん心配になっていきました。そのうち、タイヤがパンクした車がパーキングに入ってきたり、道はひび割れていたりして、祖母の家に行くことができないと思つたし、祖母と電話がつながらなくて、「だいじょうぶかな、ちゃんと、避難できたかな。」と心配になりました。でもすぐに祖母は近くの集会所に避難していて電波がつながる携帯を持っていた人に携帯を借りて、無事でいることを連絡してくれました。祖母が無事なことに安心しましたが、その後しばらく連絡が取れなくなり、本当に心配でした。後から聞いた話ですが、電気やガス、水道が止まり、しばらくは集会所で大変な生活をおくっていたそうです。夜も余震が起るたびに目がさめて、怖くて避難所にいるみんなで手をつないで夜をしのいでいたと言っていました。ねられない日々が続いて、アラートが鳴ると心臓がドキドキしてしんどかったという話も聞きました。だいじょうぶかな怖いだろうなということも思いながら聞いていました。

地震後のことが心配でしたが、ライフラインが整ってないことや道がひび割れて危ないからとしばらく祖母の家に行きませんでした。でも、心配だったので「行きたい。」と伝えると、祖母が白山市のぼくたちの家まで会いに来てくれました。祖母の方が大変な生活をしてい

るのにぼくや家族におかしやフルーツのおみやげを持ってきてくれたり、たん生曰プレゼントをおくってくれたりしました。祖母は地震で苦しい思いやこわい思いをしているのに、ぼくの事を思ってくれて大切にしてくれてるんだなと思ううれしくなりました。そしてぼくも大切な祖母に何かできることはないかと考えました。ぼくができることは、能登に行つて祖母のお手伝いをしたり祖母のおしゃべり相手になる事です。どうしてかという地震で家のたなや荷物が倒れてぐちゃぐちゃになっていている事や、避難所を出てからは、近所の人と毎日のように会えるわけではなく、地震が起きるとこわくて苦しいし、不安だと聞いていたからです。

ゴールデンウィークには家族で祖母の家に行く事ができました。家族で家の整理をしたり大きな荷物を捨てるために運び出したりしました。祖母が、「ありがとね。」と言ってくれました。いつもぼくにやさしくしてくれている祖母の手伝いができてうれしかったです。地震が起きる前は祖母の家に行った時に、植物公園に遊びに行ったり、海でいこと遊んだりして楽しい思い出がたくさんあります。でも、地震後は植物公園にも海にも行けません。植物公園ではたくさんある遊具で遊んだり、ソフトクリームを食べたりしました。海ではもぐって魚をみつけたり砂山を作ったりして楽しい思い出がたくさんあります。ぼくは、祖母と楽しくすごした能登でまた楽しい思い出をたくさん作りたいです。祖母はぼくたちが遊びに行くとたくさんごはんを作ってくれます。そして一緒に遊んでやさしく接してくれます。いつも喜んでくれる祖母のために、たくさん電話で会話したりお手伝いをしたりマッサージしたりしたいです。そして、祖母の負担を少しでも減らして、また植物公園に行つてたくさん楽しいことをして、祖母との思い出を作っていきたいです。